



TITLE:

20年を顧みて(座談会)

AUTHOR(S):

CITATION:

20年を顧みて(座談会). 経済資料研究 1972, 5: 34-63

ISSUE DATE:

1972-06-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/79661>

RIGHT:

20 年 を 顧 み て

1971 年 5 月 29 日

東京大学経済学部

出席者（ABC順）道家文秀	松田芳郎
原 利雄	鍋島哲郎
細谷新治	斎藤 滋
生島芳郎	杉本俊朗
川原和子	高橋良宣
河合利雄	高橋 悠
菊川秀男	辻 喜一
前田昇三	
司 会（ABC順）小松勇吉	越知昌夫

司会 ただ今から創立20周年を記念しまして、OBを交えて座談会をしたいと思います。最初に創設期のことを伺いたいと思いますが、その前にこの会が創設された当時の事情について、原さんをお願いします。

創 設 の こ ろ

原* 創設に至るまでの、当時の資料の事情ですが、まず戦後外国の図書が関西地方では非常に手に入りにくいということがありました。これは東京の本屋さん、例えば紀伊国屋書店の事務室の荷物が入ってまだ未整理の本のたなの所へ行きますと、ほとんど早稲田大学とか慶応大学とかの付せんが付いていて、本が入った途端にもう売約済ということになっており、なるほどこれでは関西へは来ないなあと思いました。丸善へ行っても同様なことでした。これには関西で我々の声を大きくして、本屋をゆさぶってやろうと思ひまして、京大・大阪市大に呼びかけて、こんな事情があるぞというようなことで情報の交換をしたことを記憶しとります。それから戦争で資料室の図書資料を田舎へ避難させてあったんですが、これらを大学へ持って帰って来る場合、ちゃんと分類請求記号が付いているのは、昔の商業学校の教科書のようなものでも大切に扱って持って帰るが、未整理で製本もしていないパンフ

* 当時神戸大学経済経営研究所事務長

レット、ガリ版刷の資料などは、戦後の交通事情の悪いことから運搬が不便なため、処分してしまうというようなことがあり、皆さん一体どういうふうにしておられるんだろうかという疑問がございました。市大の道家さんが見えました時、そういう打合会をやろうじゃないかというお話が出まして、京大の図書の係をしておられた簾（治良左衛門）* さんや調査資料を担当しておられた徳永（利慶）** さんにもこの話を持って行ったんです。又昔から三商大とって、大阪市大・神戸それに一橋は学生・教官・職員ともいろいろ交渉が多かったので、先ず三商大を軸に諸大学、研究所へ呼びかけようということで、小史にもありますような文章をお送りしました。資料協議会のご案内を差上げるまでの神戸大学が考えておった事情は、以上のようなことでございます。

司会 道家さんからも一つお話し下さい。

道家*** 今、原さんがおっしゃったことと同じようなことなんですけれども、私の方（大阪商科大学）は、アメリカ軍に接収されて、とにかく資料が一時非常な混乱状態に陥ったのです。経済研究所の資料なんかも五日間位の間にアメリカ軍のトラックで運び出されるというようなことで、恐らく全学術機関が接収されたのは大阪商大だけだと思うんですが、そういうようなことから建て直しをやらなきゃいかんし、私は編集畑にいて資料にはあまり詳しくなかったものですから、どこか近い所で教えていただくというので、原さんの所へ何回か伺いする間に、原さんから今のようなお話があったわけなんです。大変結構なことだということで、何とか発足させようというところから、戦前には三商大連絡会というのがあり、所長会議、資料会議などといったものもあったようで、所長・資料係長ばかりでなく一般係員も含めて会合するということと、戦後の混乱期で資料がどうなっているのかさっぱりつかめないんで、そういった情報の交換ができたらということから始まったと思います。

司会 この年譜を見ますと、第1回の会合に一橋の細谷さんもおいでになっているようなので、第1回の会合前後のことを三商大の一つとして伺えましたら……。

細谷**** もう古いことで、細かい事情は余りはっきりしないのですけれども、私共が参加した理由はやはり同じようなことなんです。私昭和20年に今の経済研究所に就職しました。当時、私共の所長は大塚金之助先生で大変書物の好きな方で、文献目録などもいくつかお作りになった方でした。その時、私の同僚で、第1回の

* 京都大学経済学部図書掛長

** 京都大学経済学部調査資料室

*** 当時大阪商科大学経済研究所編集係長

**** 一橋大学経済研究所助手

出席者名簿に名前のでている宇津木正* さんも一緒にでした。戦時中東亜経済研究所といていたのを整理して、大変な時間をかけて再発足したんですが、そのときに宇津木さんと私は助手という資格で残ったんです。これは大塚先生が欧米でご覧になったライブラリアンを日本でも育てようというお考えからで、私達先生に呼ばれて「あなたは Bookman におなりなさい」といわれた、その言葉を今だに忘れないんですが、それでとうとう私の一生が決められちゃったんです。(笑) 私共がこの協議会に参加した当時は、経済研究所の発足の時期だったのです。私共は書物のことについて、大塚先生から相当シゴかれまして、書物の収集など、先生が私達を神田へ連れて行きまして、書店の特徴とか書物のことなど実地に教わったんです。実習ですネ。当時、神田には随分いい洋書が安い値段で転がってまして大変楽しい買物をいたしました。輸入の方はさっぱりはつきりしませんで、どうなっているのか分らないという状態でした。そんなことで、どうも一橋だけでは心細いという感じを持っていたところへお誘いがあったんで、宇津木さんと私が喜んで伺ったようなわけです。それから、これはもう少し後の話になるかもしれませんが、もう一つ私達がこの会に期待したのは、相互貸借ってことだったんです。一機関だけの蔵書ではだめだから、ヨーロッパあたりで盛んに行われている相互貸借の方式をこの協議会でも成文にして実施したら、少ない洋書が活用されるんじゃないかということで、その点も私達の一つのねらいだったと記憶しています。

道家 昭和22・3年ころまでは、関西では資料入手の事情は非常に悪かったんです。全部東京に取られるもんですから……。ザラ紙でできたような本がすぐ売れたんですネ。だから関西へ来ないんです。そんなのをどうしたら早くつかめるかということがまず問題だったんです。そのうちに何とか本は手に入るようになったが、官庁資料は入手しにくいという時期がかなり長く続いた。そういうものの情報をいち早く東京から得たいという目的もあったわけなんです。

杉本** 洋書が輸入され始めたのは20何年ころだったですかネ？

原 アメリカ軍の輸送物資と一緒に積込まれて、横浜に入ってきた。私達は紀伊国屋さんにも大阪に支店を出して下さいと随分迫り、やっと大阪駅前に出してくれたようなわけです。そのほかの本屋さんにも、丸善のように関西に支店を出して、東京に入った本の10冊のうち4冊は関西に回すようにして欲しいという話をしたことを憶えています。

杉本 私は、道家さんの研究所で藤田さんがやってた産業何とか研究会って別途資金の会の東京駐在員みたいなことをやらされてたんですヨ。東京での洋書入手係

* 当時一橋大学経済研究所助手

** 当時横浜国立大学経済学部教授

ですヨ。

道家 22〜3年ころから洋書が入りだしたんですけれども、雑誌が非常にむづかしかったことを記憶しています。

杉本 CIE のライブラリーへ行って見るしかしようがなかった。

原 そうでしたネ。

道家 25・6年ころからじゃなかったですかネ。雑誌が入りだしたのは。

川原* もう少し前からじゃないですか。私26年の1月に名古屋へ行ったんですけどネ。そのころには既に雑誌少し取ってましたからネ。24〜5年から取り始めてたんじゃないでしょうか。

細谷 私達、外国雑誌を一番沢山チェックできたのは東京大学の総合図書館で、CIE のライブラリーよりも沢山来てました。

司会 協議会がこうして設立されたわけで、大体創設の目的などもお話しいただけましたが今進んでいる方向と当初の目的なり方針なりとが違っているような所がございましたら、そういうことも聞かせていただきたいと思います。

原 私達が最初ねらったのは、もち論ここに書いてありますように、今どういう資料がどこにある。あるいはどんなものをどこへ注文した。といったような情報の交換が主なものでした。その他に懇親会といいますが、お互いに親睦を計ることも相当大きなウェットを持っておりました。そうですネ、10回位まではそういうことができた。今のようにこんなに多くの加盟機関があって、一つの学会のようになってしまいますと、立食でビール・パーティーでもやるというのが関の山だと思いますネ。昔はそんなに膝つき合せて、暑い時分だったら諸肌ぬいで歌唱った。(笑)というように非常に楽しみにしておりました。仕事の内容は変っていったが、懇親会そのものは、皆さん賛成で(笑)続けておりました。

司会 創設期のことで、新しい方からお聞きになりたいようなことはございませんでしょうか。

松田** 日本でドキュメンテーションのような仕事をやるのに、共同作業でやったのは、関西の方が進んでたようですネ。昔の東京商科大学(現在の一橋大学)にしても、帝国大学系の大学にしても概して共同作業ということには消極的だったと思うんですけれども、戦後は東大の社研にしても、京大にしても、こういったことに積極的に入ってやられたというのは、どういう経緯からだったかということを知りたいと思うんですが……。

前田*** 京都大学の場合、戦前の一つの研究の姿勢として、経済の理論的、歴

* 当時名古屋大学経済学部助手

** 小樽商科大学助教授

史的研究が一つのタイプだったと思います。戦後は、経済の実証的な研究を進めて行く必要なり、要請が生まれてきましたので、経済学部では、実証的研究に即応するような態勢を資料部門としても固める動きが昭和25年ころにスタートしました。ところで東京の人々は、今お話しのように研究者個人が実証的研究に必要な資料を各官庁より直接提供を受けるということが容易だったんですが、関西の場合、東京へ行くのにやはり今と違って8時間から10時間もかかる、切符も容易に手に入らないので、実証的研究に必要な資料を個人で集めることが非常に困難なことでした。そこで資料部門をつくることによって、実証的研究に必要な資料を組織的に集める必要が生まれてきたのです。このようなことが、調査資料部門の再発足の理由だと思っておりますが……。

原 神戸の場合を一寸お話ししましょうか。神戸が戦前から文献目録を国民経済雑誌の後に付けて出しております。それから昭和初期、増井先生のビブリオが出たり、それから経済法律文献目録を2冊出しております。これは、滝谷善一先生、保険の先生だったのですが、非常に今でいうドキュメンテーション、そういう仕事がお好きだったんです。毎日各国の新聞を教官がチェックする。それから日本の各地の新聞を集めてクリッピングする。その上、毎日経済日誌を大きな紙に4・5名かかって書きました。当時、満鉄の調査課がこういうことをよくやっておられるということで、満鉄と横の連絡を結びまして、日本銀行の調査部が世話役になりましたか、全国調査機関連合会というものをつくりました。これは、大学だけでなしに各企業の調査部なんかも網羅した連合体で、非常に活潑に動きました。関西の大学では大阪商大、神戸商大(今の大阪市大、神戸大)が世話役になって、よく会合を持ちました。たしかに関西にはこういう資料収集に熱心な滝谷先生のような先生がおりまして、そういったことから自然附近の各大学に調査課あるいは研究所が出来て来たんじゃないかと思います。

河合* そういうことはあると思いますネ。大原社研は、今は法政にありますけれども、戦前には大阪の天王寺にあったわけです。大正9年に創立されて、昭和12年ころまでですかネ、大阪にあったのは。その時代に資料類を随分集めたようです。労働組合のビラ、農民運動のチラシ、それから旗のようなものまで、いろいろ収集されています。今お話しになったような、各地の地方紙の新聞の切抜きのスクラップ、それから雑誌の索引カード、それは労働年鑑の巻末に索引を付けてました。そんなことがあり、その伝統を受けて、法政の大原社研には資料の好きな人が育っていきます。そういう観点からいうと関西がドキュメの発生地という感じがしないで

* * * 当時、京都大学経済学部助手

* 当時、法政大学大原社会問題研究所勤務

もありません。

松田 私が知りたかったのは、なぜ関西では共同研究みたいな形に組織ができて、関東の方は、そういう形が育たなかったのかと……、大体関東の先生方は一人でこつこつとやられ、どちらかというとオープンな形で資料ソースを公開するということには余り積極的ではなかったんではという、何かそんなような印象があるんです。それが、戦後東大の経済学部なんかでも性格が変わったのか、対外的に共同利用というようなことに協力的になったという感じがするんです。これは一体どういう雰囲気の違いなのかなアという気がしてたんですけど……。

杉本 東大は、一つには関東大震災で焼けちゃったということが影響してるんじゃないですか。東大経済学部が当時の法科大学から独立したのが大正8年か9年ですね。4年位たって、例の統計学者のエンゲル文庫だとかあったのが全部震災で焼けちゃって、それから又集めだしたんで、対外的にいろんなことをやるという余裕がなかったんじゃないですか。それに、東京帝国大学というエリート意識もやっぱりあったでしょうネ。

細谷 杉本先生と大体同じようなことなんですけど、結局関東ってのは、東京帝国大学が学問の総本山だったんで、その学問では実証研究が全然なくて、理論さえあればという……。それに対して、関西の方は違う学風で東大に対抗（対抗したからそうなったのか、その辺は分らないんですけどネ。もっと風土とかいろんなものがあるかもしれないけどネ）、とにかく関東とは違う実証的な学風がありましたネ。それがやはり、図書館とか共同作業とかが進んだ原因じゃないでしょうか。

道家 松田さんのご質問の件ですけどネ。手前味噌になりますけれども、大阪商大ってのは大体実証的研究が主たる研究の目的だったのです。従って先生自身も資料を扱うことが多い。一方神戸大学もそのような方向にあったんで、自然先生方の交流があり、互いに情報交換が行われるようになっていったんじゃないかと思えます。

細谷 少なくとも社会科学系の優秀なライブラリアンてのは、関西なんですヨネ。天野（敬太郎）さんにしても、大原社研の内藤（赴夫）さんにしてもネ。関東ではそういう人が育たなかった。そういう空気がなかったですネ。

司会 次の話題に移る前に、会の名称についてお尋ねしたいと思います。小史で見ますと、最初『調査事務協議会』という呼びかけで始まり、第1回の会合（昭和26年1月）の時、『経済調査資料協議会』ということになって、あとで『経済資料協議会』に変わっております。又、英語の名称も3回ほど変わったようですが、会の名称の決定についてお話しいただきたいと思いま。

生島* 名称は、一番初め第1回の会合のときには『調査事務連絡協議会』で呼

びかけ、会議で『経済資料調査協議会』となって、経済という字が入りました。とここで、第1回の時に決めたのは、『会合は年2回、春秋に関西と関東でしょう。メンバーに名古屋大の経済調査室と横浜国大の国際経済研究所を次の会から入れよう。会のセンターを一橋の経済研究所に置く』といったようなことが決ったわけです。ここに、第1回と第2回の記録がありますのでまとめてみますと、『一橋の動議により、各研究所の研究方針、資料収集方法を報告することに決定した。』各機関からの報告のあと、資料収集についての詳しい話を細谷さんから伺いまして我々は、「細谷さんはいろいろなことを知ってはるなア」(笑)と感心しまして、これはもう細谷さんを利用するに限る(笑)と思ったわけです。それで一橋で注文している資料名を全部各機関へ流そう、又どこが何を注文しているかということも交換しようじゃないかということで、第2回の時に、フォームを決めて各機関で回そうじゃないかということになりました。又、ソ連・中国関係の資料の入手先や取扱書店などの情報交換や苦心談などがありました。そういう情報を関西側は知りがっていた。それが非常に必要性があったですネ。

原 そのころは、丁度今日位の人数でした。こんな格好に机を配置しましてネ。

生島 第2回は5月(昭和26年)に一橋でやったんですが、その時に、水田(洋)先生** が来られました。その時、文部省の馬場(重徳)*** さんも初めて来られました。そしてあと2—3回しまして、斎藤国夫**** さんが、ずっと協議会の後楯となってやって下さったのです。

司会 関西では、実際の切実な要求からこういう資料協議会というものを作ったんですが、創設に至るまでに、どういう方向づけでこの協議会を持って行ったらいいかというようなことは、具体的にはお話が出たんでしょうか。と申しますのは、実は名前がですネ、英語の方は Association of the Economic Research Library で、今 Documentation という言葉を使っておりますが、この辺に前史としての面白さがあるんじゃないかと思うんですが、この辺如何でしょうか。

杉本 第3回京大でやった時、会則を定め会名を『経済資料協議会』Association 云々と書いてありますネ。

道家 それで前田さんの所で英文を考えていただいたような記憶があるんですがネ。

生島 2回目の時だったかに、細谷さんがイギリスの ASLIB のことを紹介され、

* 当時、神戸大学経済経営研究所図書掛長

** 名古屋大学経済学部教授

*** 文部省大学経済学部情報室専門員

**** 同上

そういう方向をある程度この会に持たして行こうという話をされたんじゃないんですか。

細谷 ええ、私自身はやっぱりドキュメにもって行きたかったのです。

文献季報の誕生

司会 現在の『経済学文献季報』、ああいふドキュメンテーションをやりたいとか、あるいは将来やらなければならないということが、創設期ならびにその前史でございましたでしょうか。

細谷 私の記憶じゃそういうことはないですネ。とってもそれどころじゃなくて、新しい本がどこにあって、どうやって買うかという情報交換で手一杯というところだったですネ。

道家 とにかく、情報の交換ということが第一、それから後で懇親会をやるっていうのが大きな目的でしたヨ。

細谷 もう一つ、資料の相互貸借っていうのを、できれば機関間協定でやりたかった。だけど、これは成文化で

きなかったで、お互いの個人的な話し合いで、それぞれいろいろの便宜を受けました。それ以上には別に考えなかったですネ。

原 全然考えていませんでしたネ。文献季報の話が出た時には、やるかどうかということについて、相当もめましたネ。

司会 3回目から文部省の方の出席があったということでしたネ。で、この小史を見ますと文献目録刊行について文部省からも要請があったようですが……。

細谷 私、一寸いきさつを申し上げますと、それは将来の問題として忘れてはいけないと思うんですが、終戦直後文部省大学学術局と国会図書館とで、洋書のユニオンカタログ作成の意見の食い違いがありまして、文部省の中心になったのが馬場(重徳)さんなんです。要するに馬場さんは文部省でやりたかったんですが、残念ながら文部省には兵隊さんがいないわけですヨ。(笑)それで、協議会がこの仕事を引受けられないかどうか打診するためというのが、馬場さんが会に出席された最大目標だったんです。(笑)結局、それはとても協議会の手にも余る仕事だということで受けなかったのですヨ。

原 いや、それは私らネ、細谷さんが文部省とうまく話をして、我々にこんな



仕事を持って来るかも分らんと非常に警戒したんです。(笑)あの当時はネ。あれ文部省でなければ、早くから乗ってたかもしれん。文部省というので皆警戒したんですヨ。

道家 名古屋の総会位までは、情報の交換だとか、予算がどうだとか、そういうことばっかりやってたと思うんです。これでは何かこう食い足らんということが出て来たと思うんです。それで、何か会として出来ることがないだろうかというところから、文献季報という案が、これは後のことになると思いますけれども、出て来たように思うんですけれどもネ。

司会 細谷さん、季報の生まれる直前の状況をお話していただけませんか。文部省からそういう要請があったけれども一応は断わられたんでしょう。

細谷 文部省から頼んで来たのは、洋書の全国ユニオンカタログで、文献季報とは関係は全然ございません。

杉本 私が昭和26年11月に横浜国大へ行く前に、日本経済学会連合の評議員をやってたんですヨ。戦後学術会議が出来たんですが、学会連合ってのはその裏機関として出来たわけですヨ。学会連合が出来てそこでインデックスを作ったらどうかって話が出たんです。その当時法律の方でそういうのをやりだしたんです。文学・歴史・哲学なんかも抄録なんかを作りだした。経済はまだ何もなかったんです。一方神戸大学とか京大では、例のガリ版刷りのを出してたでしょ。しかしあれは必ずしも網羅的でない。又あれを毎月1回ガリ版切るのも大変だということで、共同でやったら、かなり網羅的なものが出来るんじゃないかという話も出てネ。又文部省の方でも経済学には何もないから、そういうのを作ったらどうかという話があって、僕がいつかこの協議会の総会で提案したような記憶があるんですがネ。

司会 昭和27年ですネ。

細谷 *Japan Science Review* ってのは……。

杉本 あれは、学会連合で出したんですがネ、*Japan Science Review* には、各部があって *Economic Series* は僕が編集委員でやったんです。季報が出来てからは、季報を利用してタイトルを英訳したんです。季報の誕生については、文部省の勸奨があったんです。経済学の部門じゃ何もないし、補助金に二次文献のわくが出来たんで、印刷費の補助金を出すからおやりなさいってことになったんですヨ。

細谷 その辺は、前田さん詳しいんじゃないですか。実際に作ってたんだから。

前田 いや、私は『文献季報』初号編集の工場長ですからネ。(笑)文部省との関係は知らないんですが、ただ人伝に聞いていることで間違ってるかもしれませんけど、文部省の勸奨があったことは事実だと思いますが、助成金の話はもう少し遅れ

るんじゃないですか。

杉本 ええ、これは遅れたんです。季報の第1号の刊行のことば、これ私が書いたんですが、ここにこう書いてありますネ。『1952年8月文部省大学學術局に學術情報室が設置されて、その事業の一つとして全部門のドキュメンテーションが促進され、自然科学部門では膨大な文献目録が作製された。社会科学部門では数年前より法律学・政治学・文学・社会学の文献目録あるいは論文抄録が刊行されただけで、経済学は一人取残されることになった。そこで数年前、學術情報室の勸奨により、経済学文献目録の作製計画が立てられたが、期末だ熟さず実現出来なかった。ついで、この計画は日本経済学会連合に持ち込まれたが、編集などの点で障害が起こりこれもさ折した。このような幾多の計画が失敗したにもかかわらず、1955年秋経済資料協議会が、この困難な事業に当ることになった。』といっていますヨ。實際補助金は一寸後です。初めは学会連合が金を出してくれたんです。

細谷 そうですネ。都留先生ですネ。10万円出してくれて……。

司会 そこで、この小史を見ていきますとですネ、例えば杉本先生から経済学文献インデックス作成計画について、前田さんから項目別による文献目録編集についての討議事項が討議されてるわけでございますけれども、この点について少し詳しくお聞きしたいのですが。

杉本 30年の第9回総会、その前に何か謀議したんだったかな。

細谷 三田の慶応の前の宿屋へ泊り込んだことありましたヨ。あの辺で謀議やりましたヨ。

原 神戸は、ずっとああいう仕事しておりましたんでネ。案外簡単に協力できるなあという気持ちでおりました。それで、前田さんあたりが大分熱心だったように思いますネ。是非やろうと言って、それで編集があっちへ行っただすヨ。

前田 いやいや、そうじゃないんです。今の小松君の質問ですが、私が特定主題に基づくビブリオグラフィなり、インデックスを編集することを提案した背景は、各大学で実証的な研究がスタートしますと、編集目的としてまず収集の便宜に供することを目的とした所在目録、次はカレント・ビブリオグラフィ、その二つの形で書誌活動が活潑になって来るわけです。私は、共同研究なり、実証研究の研究課題を会員機関から持ち寄って、共同で共通課題に副ったビブなりインデックスを作ってはどうかということを言ったわけです。そのような意味で協議会ももう一枚一単位の編集ではなく、数機関で一つのものを作っていけばもう少し内容のある編集が出来るんじゃないかと考えたわけです。そのことは、すぐ文献季報には結び付かないんです。さきの話にあった、私が文献季報の計画段階で非常に積極的であったということは、絶対ウソなんです。協議会総会といったオフィシャルな場で、編集

が具体化されたのは、同志社大学での総会の時に、たまたま調子のいい人が司会者で、文献季報作ることにならしようという発言で、簡単に決ってしまったという感じでした。というのは、その間2年か3年季報を作ろうという瀬ぶみなり、理解もあったわけです。私は関知しませんでした、三田謀議も含めて……。その次には、それじゃ誰が、どこで出版するのかと、さっそくお金のことも話題になって(笑)……。その時に「わしは岩波に顔がきく」とか、「おれは東洋経済に知人がいるから……」とか、「日本評論社なら協力的だろう」と、調子のいい話が出ました。関西には、社会科学系の出版社が僅かしかありませんので、交渉相手なしとみて、私は黙っておりました。その時「京都に有斐閣の支店もあるやないか。相談に行ってい」いうなりゆきになりました。それで各々が出版社を割り当てられましてネ。私は有斐閣担当ということになったわけです。私はせっかちだったものですから、その翌日に有斐閣京都支店長の出浦(栄)さんに会い、趣旨を述べましたところ、即答でイエスの返事をもらってきました。これがそもそも僕が文献季報にひっかかったいきさつです。(笑)それは実際にふたを開けてみますと、どなたも交渉に行かない前に有斐閣に決まったことがあとで判りました次第です。(笑)それで出版社が有斐閣の京都支店で、交渉に行ったのが京都大学経済学部だから、それじゃ京都大学編集しなさいとなかば命令のようなかたちで進行したことを憶えています。

道家 それで第1回の編集は非常に苦勞なさったわけですヨ。

前田 準備期間を入れましたら約15ヶ月、亡くなった竹森(一雄)*君と毎晩遅くまでがんばりました。

杉本 30年11月の同志社の総会で季報刊行が決まって、編集を開始したのはいつだったですかア。

前田 第1号は31年に出版されました。

杉本 6月に創刊でしょ。30年の総会で決まって、翌年6月に出た……。

細谷 編集作業の時、暑くて弱っちゃって、清滝へ行ったのは……。

杉本 それは2号の時だヨ。

前田 1号は結局京都大学に押し付けられたわけです。しかし、私はこのような仕事は、組織として引受けるのが当然だろうと考えまして、学部長に相談いたしました。時の学部長堀江保蔵先生は、このような仕事に大変ご理解のある先生で、「是非おやりなさい。協力します。」とのお話で、学部や教官の協力を得ることも出来たわけです。それともう一つ、これは京都あるいは広く言えば関西の特性だと思いますが、地域でお引き受けすることを考えました。そこで、同志社大学と立命館大学

* 京都大学経済学部助手

とにご参加願って編集体制を整えましたが、これは非常によかったことと思っています。

細谷 立命館はどなたでした。

前田 奥田（修三）* 先生です。奥田先生は歴史の専門家ですから、地方史関係の収録雑誌の決定については随分お知恵を拝借いたしました。同志社からは大隅（逸郎）**さんと藤枝（滯子）***さんが参加されましたが、大隅さんは中国政治史の研究家でしたので、中国文献の採録についてご協力いただきました。藤枝さんは、ほとんど毎日京大へ来ていただいて、私たちと一所に作業をしていただきましたが、このような同志社大学のご援助に感謝しておりました。このような強力な編集態勢で、それに東京・横浜から時折杉本先生・細谷さんが編集作業に参加していただいたわけです。ずっと常駐していただくわけにはまいりませんので……。

司会 話が前後するかも知りませんが、経済学文献季報を創刊しようという考えから創刊までは、やはり2・3年はかかっているということなんでしょうか。

前田 そのようだったと思います。

司会 それと同時に、経済学文献季報の内容ですネ、採録するもとの原本というのは、創刊までに大体資料を収集するめどがついた、あるいは蓄積ができたという段階があったわけだろうと思うんです。つまり、これ位の各機関の蓄積があれば文献季報が創刊出来るだろうと……。現行のように各採録機関の持っている雑誌をもとにして、やはり採録作業を進めて行こうということだったんでしょうか。

杉本 大体このころ洋雑誌などが順調に入りだしたわけですヨ。なかなか全部取れないし、目も届かないんで、とも角こういうユニオンインデックスを作ったかどうかということもあったんですヨ。それと、もう既にユネスコの例の *International Bibliography of Economics* が出だしたんですネ。第1巻と第2巻あたりが……。

生島 ですからあの時、新しい雑誌でこればと思うのをまだ取ってない所には、これはおたくの専門分野だから取ったかどうかと勧奨もしたことがあったですネ。そして採録して下さいというようなこともしました。

細谷 分担はあの時決めましたネ。大体今のに似た編集態勢を最初からとってましたネ。

杉本 受入雑誌目録なんかを持ち寄ったですネ。あのころは毎年総会のたびごとに受入雑誌目録を黙ってても渡すことになってた。今はやってないけどネ。

* 現立命館大学産業社会部教授

** 同志社大学法学部講師

*** 同志社大学研究所職員

道家　そして、そのたびに分担を変えたですネ。3・4年の間は毎年やったと思いますが……。

前田　今と比較しますと分担校が非常に少ないので、採録が特定機関に集中しておりました。それに編集マニュアルは作りましたが、創業当初は原稿カードの書誌的事項の記入が不統一になりまして、ある分担機関の原稿カードは、編集センターで全部書き直すというようなこともありました。それから、当時はまだ戦後の混乱期が続いておりましたので、資料の交換業務も十分に確立してないために、和雑誌でもラッキングとして報告されることが多々ありました。そのうちには実際には発行されているものがあり、その補充は京大で全部埋める仕事が大変な負担になりました。それから Author の読みを調べるのに大変な時間を使いました。中国人名をふくみまして……。

司会　「経済学文献季報」という名前の誕生について……。

前田　細谷先生は当時、いつもポケット・ウィスキーを持って旅行なさってましたでしょう。(笑) ウィスキーを飲みながらパッと出た一言が「経済学文献季報」だったと記憶しています。

細谷　何か、案外感じいいんじゃないかって、ほとんど迷わなかったですネ。英語に直したらそれも意外にうまくいって、これでいこうということで……。

杉本　この英語名称は、僕が付けたんですヨ。

司会　現在の文献季報のレイアウトは、どのようにして出来上ったのでしょうか。

杉本　欧文の雑誌のユネスコのものがもう出てましたんです。それと、例の FID—国際ドキュメンテーション連盟の刊行物を参考にしたですネ。

細谷　欧文は完全にユネスコの IBE にならいましたネ。

司会　分類表も……。

細谷　分類表は違います。創刊号は、当時の他の索引誌の水準からすれば、抜群のものが出来たと思うんですヨネ。本文にしても、表紙のレイアウトにしてもネ。それは大変なものだと思いますヨ。今だにほとんど変更してないですからネ。

生島　序文の英訳、あれも京都でしたんですネ。

前田　留学生でシェルドンという人がいましてネ。彼が、英訳の校閲では随分協力してくれました。

司会　季報の回数については、初めから一遍に決ったわけですか。年4回出そうとか、あるいは、いろいろの考え方があったと思うんですけど……。

前田　速報性ということが、編集の大きな目的の一つでしたが、Monthly は到底出せない。出せるような態勢がありませんから……。当時1冊を出版するのに2ヵ月かかるわけです。季報の編集と日常業務との兼ね合いを考えますと、Monthly

は到底望めない。いくらがん張っても Quarterly より出来ないということになりました。Quarterly で出版する理由は他にもありましたが……。

細谷 道家さん、私の記憶ではたしか大阪市大の社会科学文献解説と、それから経済評論の巻末の月報とが頭にありましたネ。あれとダブらないようになって、結局その間をいこうと……。

道家 一応あれにつながってくることになるわけなんですけど……。

原 有斐閣は、それについてくちばし入れなかったんですか。

細谷 編集方針ですか。

原 例えば、Quarterly にするとか、Bimonthly にするとかいうような。

前田 私交渉に行きました時には、Quarterly にすることが協議会として決まっておりましたので、その旨お話ししましたがもち論結構ですとの話でした。出浦支店長はインデックスなりビブリオグラフィに対して非常に理解のある人で、もと日本評論社で法律時報の文献目録を編集なさった方で、ご意見として Monthly で出すことは、大変な仕事になる。専従職員もいないことなら Quarterly が適当ではないでしょうかということになりました。

杉本 有斐閣は、非常に積極的でしたネ。だからこれ有斐閣のリスクにおいて引受けたんです。まだ助成金も何もないのに、印刷費から全部、有斐閣の出版物としてやったんです。

細谷 部数はかなり多かったですね。

前田 2,000 部でした。

司会 戦後初めて経済学文献季報のような目録が出来たわけですがけれども、利用者の方々はそれをどう受け止めていらっしやいましたでしょうか。その評価などについて、杉本先生いかがでしょう。

杉本 初めこれがどの程度普及しましたかネ。機関会員は買い上げをやったので、各部内の教官とか研究者の反響は分ったんですが、一般の人がどう受け止めたかとなると……。

司会 機関内での評判はいかがでした。

原 図書館長とか、図書館に関係なさった人とか、あるいは目録・索引などを一度でも編集した人が、個人的に買っていてくれて、いいのが出たなという程度でした。

河合 随分後になるんですけどネ。ここに数が出てるんですけども、31号についてみますと、個人の買い上げでは大阪市大の経研が一番多いんですネ。24冊です。その次に法政の大原で11冊、一橋が6冊です。そのような所が主な所で、あとは機関買い上げでして、機関で一番多かったのは、同志社の45冊で、一橋が40冊ですネ。

機関買い上げをしたのは個人に配布したんじゃないですか。

細谷 研究所のメンバーに配ったんです。

河合 大原では、個人に買ってもらって、その他に機関の買い上げは8冊している。僕らは当時セールスマンですから、とにかく売らないかんと思ってネ。個人に売りつけたわけなんです。そういうのは、元々好きな人達が買ってるわけですから評判も決して悪くないわけですネ。次第に値も上って来て、金の回収に僕ら随分困ったもんですヨ。一月・二月と遅れて、有斐閣に払わなきゃならないので、なかなかの金を立て替えて払ったりなんかしたこともありましたけれども……。1号は450円でしたかね。それが900円・1,200円と上って来ると、中々個人で買ってくれなくなりましたネ。伸びが段々悪くなって来たわけですが、評判の方はそう悪くはなかったんじゃないですか。

松田 私、大学の学部を出たのが33年なんです。私達が学部の卒業論文で使ったのは国会図書館の雑誌記事索引でした。小樽へ戻ってから調べてみたら文献季報があったんです。それで、それを使うようになりまして、消費函数について調べてみようと思ったんですが、あれはマルクス経済学の方が分類デザインしたんじゃないかと思うんですが、というのはそういう手法でくくって引張ってみようという時にはえらく不便なんですネ。あの頃使ってみた印象というのはそういうことです。

司会 そのころ、水田先生の所(名古屋大学)なんかではどういうふうに……。

川原 季報の創刊号が出来ました時にネ、皆で手分けしてセールスしようって。水田先生に頼んで教授会で説明していただいたんです。その時は、とにかく個人で14・5部出たと思うんです。ところが、図書室でも3部買いますと言った途端に、2号からガタッと減って、(笑)結局3人だけ個人買い上げをやって下さって、2号以下ずっとその3部だけが出てまして、それが最後には結局2部になって、今でも買って下さってます。ただし、もうご停年で退職なさってるんですけどネ。で一人の先生は、農業経済学のご専門なんで、割とよくご利用になってるんです。非常に助かるって喜んでおられます。それから、古本の値段が段々上って来ましたのでネ、「私は創刊号から持ってるから大分金持になった」と言っておられます。(笑)利用者の声ってのがネ、どうも届いてこないんですネ。確かに最初のころよりか段々しり上がりに関心が強くなって来てますネ。最近、今松田さんがおっしゃったように研究者よりも、大学院の学生が非常によく使ってるんです。図書室に置いてありますけどネ、大体毎日のように使ってます。それと、さっき松田さんがおっしゃった、研究者の使い方の角度がやっぱり一寸違うもんですから、例えば国民所得に係する論文拾おうと思うと、結局文献どこに入ってるか分らないんです。全部見なきゃならないでしょ。で、自分でやるの時間掛かるもんだから、大学院の学生に下

請けでやらせるわけなんですけど、結局関係ある分類項目を全部拾ってみなきゃならないので不便だということを聞きましたけどネ。あれが Subject 何何かの索引で簡単に出て来るような仕組みになってると非常に便利だということを聞いてます。それから、経済史の先生ですけどネ、経済史プロパーよりか、歴史についての細目が完全に出来てませんでしょう。そのあたりにむしろ必要な資料があって、季報に出て来るのは、ごくスタンダードな当たり前の資料であって、本当に必要なのは出てないって感じらしいんですネ。だから一定の限度までしか使えないという印象を持っていらっしゃるようですネ。そういうようなことです。

道家 私、朝日新聞の人を知ってるんですけど、この人が以前言ってたことは、要するに新聞社というような所は、速報性が第一ですからネ。3か月目に出るということは少し遅い感じで、いっそ Annual の方がいいんじゃないかって言ってます。大阪市大の研究所の場合は、初め個人で買っていたんで、給料日に私がお金を集めに回るということにしていました。それから機関で買う場合は、図書館も学部も割り引きなしで買うことにしていました。それから、先生が研究費で買う分は、全部本屋を通して買ってましたので、その数がどの位かは知りませんが、かなりあったと思います。

文献季報の転機

司会 ここで季報の危機の時期について、ご苦心談を伺いたいと思います。発行部数や経費のことで有斐閣の方から申し入れがあったわけですね。

生島 創刊して2—3年目ころから、有斐閣は言って来てるんです。資料にもありますが、33年神戸でやった総会の時に、有斐閣の岡村さんが来られて、発行状況の報告がありました。その時の報告では、当時毎号1,000部印刷しておりましたが、3年たって、そのうち450部位しか売れていない。これではとても収支償わない。毎号20万から30万の欠損がある。年間50万円以上の欠損になっているんだと……。少なくとも700部位に売上げを伸ばしてくれないかということが一つ。それに対応して、協議会としては買っていない調査研究機関に売り込むために、各自がセールスマンになろうじゃないかということになったんですネ。それから、もう一つは発行の印刷費を少なくするために、年4回の発行を減らすことと、各号のページ数を減らすことでした。これには採録文献の主題分野のうち、所謂関連分野を減らして対処することになったのです。その方策のことでたびたび集まった。東・西で……。これが33年から35年までのことでした。その時に、このパンフレットを作ってPRしようということになったんですネ。

司会 その結果はどうだったんですか。かなり伸びたんですか。

生島 それが、すぐには効果が現われませんでネエ。結局、有斐閣は、発行はやめて発売だけにさせてくれという要求が出て来たんです。それで、37年からは協議会が発行ということになったんです。その時、いろ案が出ました。古い方は憶えておられると思いますが、蒲郡会談なんていうのは、夕方から夜中までずっとこの対策協議をやったことがあったんです。編集に加えて、この危機対策に引きずり回されて、ともかく季報というのはえらい仕事だということで、蒲郡会談が当時の印象的事件として思い出されます。

司会 それまでは有斐閣にもたれっきという形で……。

前田 出版と直接経費について完全に有斐閣の危険負担でした。昭和31年には日本経済学会連合から刊行補助金を受けましたし、昭和32年からは、文部省から出版補助金を受けることになりました。

生島 32年に20万もらってるんですネ。この助成金は、そっくりそのまま有斐閣に渡したんです。

前田 助成金をもらうについては、経済学会連合の場合は杉本先生に随分尽力していただきました。

杉本 学会連合は1年きりだったかな。このころ水田洋教授が、学術会議第三部会に出ておられ、その尽力で学術会議が外国向け寄贈刊行物として100部を買上げ、また若干の作業費の補助をしてくれることになったんですよ。

司会 蒲郡会談について、杉本先生もう少し……。

杉本 蒲郡会談は、この年譜には載ってないけど、いつだったかな。

川原 35年ですネ。

杉本 印刷がずっと京都の内外印刷だったんですが、内外がやっぱり値上げを要求して来たんですネ。それで天理時報社に35年に切り換えたんです。天理の方へ神戸大や大阪市大が、沢山印刷物を頼んでるし、いろいろサービスするとか、真柱が理解があるとかネ……。

生島 そして、36年に中国文献の採録の中止と、分類表の手直し、37年(25号)から年3回協議会の発行、有斐閣は発売のみという大変革になったのです。その最終的な経緯は、記録によりますと次のようです。36年の4月に有斐閣の新川さん(編集長)、池淵さんから文献季報発行の辞退という申し出がありました。組版その他の値上げ、ストックの増加、その他の理由で一般に大幅の値上げ状況の中で、有斐閣としては検討の末、出版継続を辞退したいという意見を出したということなんですネ。協議会としては、どのようにすれば、引続いて出版してくれるか具体的に計数を出してほしいと要望、新川さんの意見では、中国・ロシア語文献を削り、直接印刷費を節約することが一つ。買い上げを100部増加してもらうことが一つ。これ

が出来れば、有斐閣としては考慮する余地があるというのが結論でした。それで、今度は関西で緊急委員会を開いて、有斐閣の京都支店の、何とか収支トントンのところまでいくようにしてほしいという希望を聞き、そこで、第一に減ページで10万円浮かすことを考える。第二に100部買い上げの可能性を検討して行こうということが決定。減ページのために中国文献を削る（当時中国文献が入りにくくなっていた）、アイテムナンバーの頭の号数を省く、関連の政治学・法学・社会学分野を除くなどの方法が考えられたのです。しかし、採算上から有斐閣はどうしても継続発行をしないということになり、やむを得ず協議会の発行となったのです。

川原 もっとずっと後に分類表の改訂をやりますネ。昭和42・3年ころに……。それまでは分類表の手直しとか、採録基準を厳密にするとかでやって来て……。

司会 それで、続いて分類表の改訂とか、採録基準の改正ということで、季報を建て直して行く段階に入るわけですね。42年にそういう時期に入ったようですが……。

河合 42年の前にも、一度分類の手直しをしたことがありましたヨ。私の記憶では、労働問題・社会問題は大体大原がやるということで（東大社研は、採録を拒否しておりまして、もっぱら私のところでやってたんです）、機関へ持ち帰って多少手直しし、総会に提出した結果、21/22号より、社会学は削除して、その内容は社会思想・社会学を一項目として再配当することになったと思います。

司会 42年の改訂というのは、どういう切っ掛けで行ったのですか。川原さんご記憶ありませんか。

川原 切っ掛けってのは憶えてないんです。ですけど、その辺の資料持って来たんですけどネ、41年の8月に4機関集まって、編集委員会開いてるんですヨネ。多分杉本先生のところ、前田さん、神戸の杉村さんと、神戸か大阪でやったと思うんですけどネ。

司会 その時代に編集幹事というシステムがございましたネ。それが集まったんじゃないでしょうか。

川原 ともかくその時代にですね、又後で杉本先生にでも伺えば、何か出て来ると思うんですけど、ともかく分類表の大改訂と採録基準の改訂をやらうって話が出て、ということしか私は知らないんですけどネ。で、その時私がネ、採録基準と編集作業に対する一般的意見という、割と詳細なものを作って、杉本先生にお送りしたんです。その時に、経済学文献季報としての、もっと純度を高めて、要するに採録が中途半端になってるものですからネ、社会思想とかいろんなものが入って来るわけですからネ、ところが社会思想の関係の論文が、必ずしも拾われたものだけでは役に立たないというようなことがあって、この際、全部カットしちゃって、経済

学の採録をもっと範囲を広く、堅実にやってって、季報の純度を高めて行ったらいいんじゃないかということを、コメントを杉本先生の所へお送りしたんです。で、それが取り上げられたらしくて、それを元にして細谷先生が季報の分類表の修正原案と、採録基準の暫定案を作られたわけですね。経過は、大体そういうことだったと思いますけれど、切っ掛けは、一寸憶えてないんです。

細谷 切っ掛けが、あなたの川原メモですよ。

川原 いや、川原メモ(笑)私のメモは、8月の委員会の後に、そういう委員会が決定したので、意見があったら送ってくれというご案内が来たんでお送りしたんですヨ。

細谷 前から分類表を直そうという動きがあって、中々出来なかったんですヨ。それが、やっとやることになったのは、やっぱり分類表を直すという大きな理由は、採録基準と関係あるんですヨ。それで、今あなたがおっしゃったようにもう少し季報の性格をはっきりさせるということが、最大の原因だったんです。

辻* 今のお話は41年です。41年の夏、浜松の弁天島でやった時です。

細谷 あア、あれで決ったんですネ。

辻 そオ、その時は組織の問題が、丁度平行して出ていましたネ。

細谷 だから、あの時にいろんな面で協議会は、改革の方向に動いていて、新規則の方向にもなったし、分類表の大改訂にもなったわけですね。だから蒲郡のあとの大きなポイントは、やっぱり弁天島だと思うんで……。

辻 あの時に先生、採録基準暫定案や、分類表の修正案を出していただいたですネ。

細谷 ええ、各機関からいろんなのをいただいて、直しちゃ又戻して、それで第3次位まで作った記憶があります。

川原 ええ、それが42年4月に暫定版として決定されたんですネ。

細谷 最終の段階は、確か関西で崎山(耕作)先生** なんか非常に協力願いましてネ。あそこで意見が対立してどうにもならなかった時があったんですヨ。特に経済理論の所で、マル経と近経で意見が対立して、収拾つかなくなっちゃって、僕もお手上げになった記憶がありますヨ。

辻 その当時、42—3年ころから会員機関がかなり増加の傾向にあったですね。で、それまでは、今でも多少そういう格好になってますけれども、採録の分担の多い機関とそうでない機関が、かなり目立っておりましたネ、中には、入会されても2・3年は大学の方針で、採れないというような所もありましたが、出来るだけ協

* 当時、大阪市立大学経済研究所編集係長

** 大阪市立大学経済研究所教授

力して、やってもらった方がいいんじゃないかというような強い意見が、前田さんあたりから出ました。あの当時、私共編集センターを担当したことがあるんですけどネ。その結果、採録基準の完備したものを作らないといけないということを感じました。採録機関が多くなりますと、どうしてもいろんな判断が出て来まして、かなりしっかりした採録基準を作って、それに基づいて採録していただくということでない、收拾つかなくなるんですネ。センターとしての負担が大きくなりますし、そういう実際上の要請もあったわけですね。第一に、雑誌をどう限定していくかということ、第二に、その中からどういう文献を拾い上げて採録するかということ、それと第三に、採録した文献を適確な分類に当てはめてどう分類するか、この三つの問題が、やっぱり基本的な問題だということを申し上げたことがあるんですけども……。

飛躍への胎動と発足

司会 今までのお話伺ってまして、創設のころは、資料を集めるということ、情報の交換が最初の目的でスタートした。そこに季報というものが入って来て、そしてただ今の分類の改訂とか採録基準を改めるということになる。この辺では、季報にはほとんどの精力を傾けていたように伺えるのですが、やはり協議会としては、大体そういう流れでしょうか。

河合 そうですね。そういうふうになんて来まして、次にここに書いてあります京大提案などが出来て来て、反省の時期が来るわけですね。で、関西部会、関東部会それぞれに分かれて何か独自の研究会を開こうというようなことを考えるようになって、多少そういう動きも出て来たと思うんです。会報なんかで見ますと、ある程度やってるようです。

辻 京大提言が切っ掛けになりまして、あと2・3年、現在の組織へ移行するための模索の時期があったと思うんですネ。そういう意味で、この京大の提案がやはりその時の一つの大きな切っ掛けを作ったということで、大きく言えば歴史的な意味があると思うんです。前田さんは、あの時にはお出でにならなかったんですか。研究所へ移られて、研究所がまだ機関として加盟に至らない時だったと思いますが、たしかあの時提案されたのは、小松さんでしたネ。

小松* いや、私じゃなくて細川（元雄）** さんなんです。私も出席してましたが……。

辻 とにかく、そういうことで、非常に大きな意味を持っていたというふうに

* 当時、京都大学経済学部助手

** 同上。

私は見えています。あとの新組織への移行ということで……。

川原 何か爆弾的宣言という感じでしたネ。

菊川* 今のお話、部会のレベルで思い返してみてもですけども、私共が入会を認められましたのは38年です。で、39年に突然に部会の当番校やれということ、今でもはっきり憶えておりますけれども、細谷先生と河合さんがおいでになりまして、膝詰談判をされた記憶があるんですが、お話伺ってみますと、とにかくやれということなんですネ。それじゃ一体何やるかってことになりますと、まあ卒直に申し上げて曖昧模糊として、要するにお前の所でやりたいようにやれということなんですネ。いろんなことを段々伺ってみますと、会の執行体制がどうも不明確なような感じを受けたわけです。ま、こんなことがありまして、関東部会では私共3機関程選ばれて、それが部会の執行部といった形になって運営して行こうということになったわけで、このような流れの中から、さきほど来皆さんがおっしゃってられるように、会が大きくなる一方、季報だけでなくもう少し多面的に活動してみたいという気運が出て来たのが、38年から41年のころじゃなかったかと、今思い返してるところなんです。

河合 元々、36—7年ころまでは、冒頭に原さんがおっしゃったように、同志的な集まりで、組織的な集まりじゃなかったんですヨ。だから、言ってみれば、同一軒の家の者が集まったといった感じでネ、むしろ懇親会の方にウェートが、かかっていたような集まりだったと思います。従って会の頭もそう必要もなかったわけですね。中々杉本先生もお引き受けにならなかったし……。それで、とにかく同志的に集って来ちゃ、例えば関東部会のだれかが、集れと号令を掛ければ、如水会館へ集って、そこでいろいろ時の話題や情報を話し合うというような形で来たわけです。それで、たまたま京大の発言があって、地域的に部会を開かなきゃならないということが出て来たわけです。関東部会では、京大の提案の前にそういうことに気が付いて、話し合いがあったんです。それと同時に、季報の売り上げが伸びないものですから、とにかく会員をふやさなきゃいかんということで、当時関東の方が会員数が少なかったんで、東京経済大、慶応の産研、それから東大の経済学部などを如何にして加入させるかということで、法政の大学院で、経済ドキュメンタリスト懇談会という名前を勝手に付けて、それらしき人を呼び集めてやったわけなんですヨ。杉本先生が協議会の小史を話して下さって、多少皆さんに理解していただいたわけなんですネ。で、翌年(38年)加盟していただいたようなわけです。それまでは、全く同志的な集まりだったですね。ですから、裏話を言うと、嵯峨野へ行ってみました、修学院離宮を見たりネ、(笑)そんなことをしてたわけです。

* 当時、東京経済大学産業貿易研究所員

菊川 今、年表を見て、さっきの発言と関連してなんですけど、丁度私の所で部会をやれと言われました時にですネ、加盟機関で、後でやめました東大の新聞研が退会したいという文書が私の所へ回って来たんですネ。その扱いに困りまして、どうするんだろうというんで皆さんに伺いまして、ま、さっき申し上げたようなことで決める所がないわけでもないんでしょうけど、どこへ持っていきましてよく分らんというようなことで、非常に困りましてネ、そんなようなこともですネ、もう少し会則などを整備して、会が一回り大きくなった以上は、その実体に合うように組織的に運営して行くといったようなことが必要じゃないかと痛感した記憶があるんです。

司会 菊川さんから、東側のその当時の事情を伺ったのですが、鍋島さん・高橋さん、そのころの関西は如何でした。

鍋島* 私の所は、40年に入りましたんでネ、東大新聞研が抜ける時……。それで、以前のこと私達全然分りませんでして、40年に入って来て、あのころは部会の研究会なんかも盛んな時だったんです。以前どんなことをやられてたか知りませんし、そのうち大学紛争に入ってしまった……。

高橋** 機関としては古くから入ってたんですけど、私自身は40年ころに入りました、あのころから今言われたように、部会の研究会が活潑になりだしたんですネ。私全くドクメの方は素人で、やりたいという気持はあったんですが……。2-3年たちまして、研究会の活動を通して大変教育されたというふうに思っております。

司会 京大提言について……。

辻 ええ、ここに書いてあるとおりでと思うんですけど、どなたがお書きになったのかもう少しその辺ご発言願ったら……。

司会 この点、一寸歴史的事実を補足いたしますと、当時もう前田さんは経済研究所の方に行っていっちゃいまして……。

前田 私は、昭和37年に経済学部から経済研究所へ移ることになり、それを機に「会報に、協議会を去るに当って何か書くように」と生島さんから言われまして……。それで、私は前から考えてたことですが、今まあ私が言うまでもない菊川さんとか皆さんおっしゃったことですが、経済資料協議会は文献季報に焦点を合わせすぎで、日常活動はほとんど皆無に等しいのではないかと感じておりました。総会に集って、次の総会までは何ら協議会としての日常活動がない。もう少し職場の中に協議会の活動を定着させて行かなければ、協議会の前途を考えて、よくないのじゃないだろうか考えたのが一つです。それと、できるだけ多くの人が、協議

* 当時、大阪経済大学中小企経営研究所

** 当時、立命館大学人文科学研究所

会の研究会なり、総会に参加することによって、次のドキュメンタリストを育てる基盤を作る必要があるのではないかということが一つです。そういうことを考えてる中で、現在の協議会の活動はどうだろうかということを非常に強く反省したのが僕の感覚なんです。そういうことを一つ原稿に書いてみようということで、細川君や小松君といろいろ話し合って結果を投稿したわけです。それが一つのショックとなって、問題を大きくしたかもしれません。私は、無責任ですけれどもその原稿を書いて、会報に載せていただいて、一時協議会から手も足も洗わしていただいた。(笑) こういう経過です。

辻　だから、さっきから出てましたけど、新組織への移行に順次行くんですけど、中々反応が鈍くてねネ。19回39年の総会の席でしたかね、実際には、私の記憶では41年ころからとりかかりましてネ、結局現行の執行体制が確立したのは、43年の23回小樽総会の時で、足掛け4年かかってるんです。

前田　結局は、原さんの先ほどのお話のように、比較的小集団の場合は同人的な集まりということで、何かと事はうまく進行しますが、組織が大きくなるに従って、やはり執行体制を確立して、業務を推進する事が必要だということに迫られてきたとみていいと思います。

司会　それと同時に、確かそれと前後して、40年だったと思いますけど、辻さんとここで世話になった時に、杉本先生の方から資料系の業務分析……、先生がお休みになって替りの方がですネ……。

杉本　遠藤君です。

司会　提案していただいたことがありまして、そういう動きが切っ掛けになって、新しい組織に前進して行ったんじゃないかと思うんですけれども……、その業務分析についてお話いただけませんかでしょうか。

杉本　ああ、あの業務分析ですか。実は、当時国立大学図書館長会議で、前から司書の待遇改善というようなことをしてたんです。が、中々大蔵省も人事院も承知しないんで、司書ってのはこれ位仕事があるんだと分析やったんですヨ。司書と資料係ってのは関連がありますので、資料係についてもああいう業務分析をやってみたらどうか、そうしないと中々今後いい人が育たないんじゃないかというような意味で、私が提案したんですけれども、あの時（現在でもそういう傾向あると思うんですが）、組合の方が、行(+)の事務官と別個のそういう司書職というようなものを作るということは分裂工作だというようなことがありましてネ、中々うまく行かなかったんですネ。

新組織の確立

司会 新組織への移行というところを、もう少し詳しく お願いしたいのですが……。

斎藤* あれはネ。名古屋の総会の時、岐阜の宿舎で突如として出て来たように記憶していますが……。

川原 その前から話があってネ、つまり加入校がふえるし、協議会が大きくなったということで、新組織に切り換えるという話が出て来たんです。その準備段階として、まず今の現行の組織の中で整備できる所は整備して、何とか格好を整えようじゃないかというのがそもそもの発端だと思うんですヨネ。それでまあ理事会制度を採るということで、その準備委員会ってのが出来たんですネ。

生島 名古屋の大会の前に、会則の変更ということから法人組織を考えたらどうかとか、他のこういう類似機関の会則など、いろいろ参考資料を集めて検討しましたネ。それを基にして総会へ持って行ったわけです。

杉本 あの法人の件は、情報図書館課が勧めたんじゃなかったかな。

細谷 あの時、確か情報図書館課の片岡さんだったかな、何か勧奨がありましたヨ。それで、法人の定款なんかの資料ももらったんですヨ。それでいろいろ研究しましたネ。

松田 最初のころから関係してらっしゃった方が、そろそろその機関をやめられるというようなことがあって、それで、ドキュメンタリストの集まりというような形にしたいというふうな意向も一部じゃ非常に強かったんじゃないかと思うんですが、そういうふうにどっちかにしないと、とにかく組織として形をなさないと……。従来の人集まりで行くのか、それとも機関の集まりにするのかという議論が、何回が出たような気がするんですけど……。

杉本 学会みたいに、個人単位の会員にするんだというような声はありましたかネ。

前田 それは、私が新しい会則をつくる段階で一案として考えてみました。

新しい発展を求めて

司会 全国的な大きな組織に成長してきた協議会はさらに発展を求めて進んでゆくわけですがその進路はどうでしょうか、まず文献季報についてお話し下さい。

斎藤 私、季報の編集センターをして痛感しますのは、Wilson の Index なんかと比較いたしまして、ああもしたい、こうもしたいという考えが、いつも付きま

* 当時、東京大学経済学部図書主任

とっているんですが、現在の文献季報の編集を一年担当しおおすということは、実には大変なことでして、もうそれだけで手一杯という状況なんですネ。けども季報というものは少くとも5年に一遍位は集約したインデックスがなきゃ使いにくいでしょうし、それから、クロスレファレンスがなきゃ具合が悪いわけです。で、現在の組織の上に立ってこれ以上どうしようかということは、とても無理なんです。この組織を皆さんに考えていただくということと、それからもう機械化時代ですから、季報の編集に機械化を導入できないかどうかということを考えていただかなきゃならないと思います。それから、利用する側に立って考えるならば、季報の市場性ということも検討しないといけない。まあ、季報編集から日ごろ考えていることを申しますと、そういうことでございます。

司会 結局、季報に余りに力を取られ過ぎてから、将来の方向として編集業務の省力化を考えておられるわけですネ。

斎藤 我々、日常業務をやっていて、それから季報の編集をしているわけですネ。日常業務を主にしないと具合が悪いんです。ところが、季報が忙しくなりますと、まあ日常業務をほうり出しかかるといのが、どこの編集センターでも実情だと思います。そういう態勢だと中々いいものが出来てこない。じゃ、どうするかというと、中々名案もございませんけれども……。

杉本 機械化については、神戸大学がセンターの時やったんすネ。

生島 バンチカードでやったんですが、文献がもっと多ければ効果が大きいんでしょうが……、配列だとか、Author Index カードの作成だとかには、大いに省力化になりました。機械化出来ない記入、分類点検などに手間がかかるんですネ。それで全部の所要時間では、マニュアル方式の15%程度の短縮にしかありませんでした。しかし、原稿カード記入や分類の標準化をはかることを考える機会にはなりましたネ。これからはコンピューターですが、さき程のキュムラティブインデックスなどにはまず考えられますね。

司会 数年前に、センターを一か所に固定させて、所謂センター村というんですか、編集村というのが出来ないだろうかという話もございましたネ。

前田 それはネ、創刊当時からありました。今にして思えばそれ程のこともないと思いますが、昭和31年ころにあのようなことを考えていたというのは、割合面白いと思います。例えば、東京に近い所で、非常に静かな所でどこがいいだろうか。軽井沢にしよう。そうすると信越線は遅いから、ヘリコプターを買おうじゃないか。(笑)ということで話は進み、村長さんは誰にしようか。村民には誰か。ということになると。「私も」「私も」と希望者が多くてネ。世帯持ちもおられました、
「世帯者は皆家族ぐるみで行こうやないか、大学をやめて!」……その時分から大

学には余り魅力なかったらしく、ビブリオグラフィ作ることが楽しくて、そのような環境を自らの力で作り出そうと同じく考えていたのでしょう。文献季報だけでは生活できないから、多くのビブオグラフィを作らないといけないといったいろいろの話がありました。

司会 ビブリオ村ということですね。

杉本 そういうことは、僕は決してユートピアでなく、実現可能だと思うんですヨ。都会は段々過密になって来て、こういう仕事はもっと静かな所へ行行って、通信や交通がもっと発達すれば、かえってそういう所でやる仕事ですヨ。

前田 その時分からやっぱり今の流行の TSS システムらしきものを考えてたんです。すべての本や雑誌が、その場に無くたっていいんじゃないか。本当に優秀な人を村民に集めれば、あとは電話回線を使って調査する方法なども話していましたが、15年後にそれらしきものが、追いかけて来るようになったんです。

生島 金がないばかりにネ。(笑)

杉本 誰か金出すのがいたら、そんな仕事やってみたいですね。(笑)

生島 そうなったらネ、いちいち文献季報もカード書きとったりせんでも、寝てる間にひとりで出て来て、起きてみたら 100 文献溜ったなんてことになりますヨ。(笑)

前田 その当時感じたことですが、文献季報の編集をもう少し機能的にやれないだろうか。各機関からの原稿カードが、不完全な原稿であるために大変な労力が必要で、それならば、解決策の一つとして、ビブリオ村に専従職員を確保すれば、もっと早く水準の高いビブリオグラフィが出来るだろうと考えたのが切っ掛けです。しかし、どうも実現不可能だということで、じゃ、実現可能は何だろうかと考えた案が、一か所固定専従案、例えば神房大学に専従者を 2 名位入れるということでした。それではどうして専従職員を確保するかということですが、文部省は金は付けても人は付けられないということを、まず頭から考えるのです。文献センターを設置する時に便乗して二人位確保できればよかったのですヨ。そうすれば、これらの方は、『季報』専従者として活躍していただく。これは実現可能じゃないかと思って、生島さんと随分相談したこともありました。少し話がそれますが、文献センターを作る時に、金は出すが人は絶対付けられないと言うんですネ、だから既存のライブラリーなり資料課を一応解散して、文献センターにする。従って人は確保できているから、あとは資金のみでよいのではないかと、亡くなった斎藤さんはそういう話をなさいました。私は、それは絶対駄目です。優秀な人を沢山入れるための定員を付けなきゃ駄目だという話をしましたところ、そのような話は全然考えられない。人をふやす、定員を付けるということは絶対出来ないことだと決めつけられました。

で、私がそんなこと絶対ない。まあやってみなさい。と申しあげましたところ、文部省の幹部の意見もあって、定員を付けることに成功したように聞いておりました。編集センター固定案を推進することを考えてみてはどうかと思います。

杉本 JICST に見合う社会科学系の特殊法人でも作って、そっちへ移管するとうようなことも話が出たんですネ。それから、社会資料センターが出来るっていうんで、去年の今ごろ学術会議で公聴会みたいの開いたことがありましたネ。あれに、僕も出たんだけど、結局センターの性格がはっきりしないで、うやむやになっているうちに今度国文学資料センターが一足さきに出来るようですね。

司会 そろそろ時間になったんですが、まだ将来展望(ヘリコプターなんかの話がありましたけど)(笑)をもう少し身近かな問題で……、鹿児島の高橋さんなんかが会に入られて、こんなことというご希望がありましたらお願いします。

高橋* 私のところが会に入らせていただいたのは、たまたま大学が新しく研究所作ってプランがありまして、そのことで、京都の前田さんの所でいろいろお話を伺っております中で、協議会のお話が出ました。丁度うちでは35年以前のデータに穴があいて困っていたもんですから、そういうこともあって、こちらへ入れていただいたようなわけなんです。このことは、うちの部内では非常にいいインパクトになったと思うんですけれども、やはり入って非常に卒直な言い方をしますと、文献季報の作業っていうのが表面に出て来まして、極端に言うと、そのための協議会という印象がしました。今日、初めていろいろお話を伺いまして、これまでむづかしい多くの問題を検討されてきたんだなあということが、初めて分ったんですけども……。我が参加させていただいた時に、文献季報の作業はこれは一種のオブリゲーションだと思ってますから、それはいいんですけれども、やはり何か考なきゃいけないという印象はございました。ただやはり我々は、新しく入って来てそう思うわけですけども、やはり古い組織には古い経緯があるんで、その辺がやはりある意味ではずっといらっしゃるから中々意識的にスイッチ出来ないということはあるだろうと思います。そういった意味では確かにこういったこれからさきにやるべき仕事というものを、むしろ過去がどうだったと言うより、これから何をするかということを考えた方が、はるかに建設的じゃないかと思います。今たまたまビブリオ村のお話がありましたけれども、うちあたりはいい候補地じゃないかと思います。

(笑)

司会 OB の方から、今の協議会をご覧になって、お感じになったことをお聞かせ下さい。

原 こんなに大きくなったら、法人組織を一応考えてみる必要があるんじゃない

* 鹿児島経済大学地域経済研究所助教授

いかと思いますネ。ただ、社団にするか財団にするか問題だと思いますけど……。

前田 将来の方向としては、法人化も考えられますが、法人格を持つと協議会の基本的性格を変えなくちゃいけない。まず第一に機関加入の原則が崩されるわけですね。財団ですから相当なお金を準備することが必要となりますし、財団法人の理事とか幹事は、全部個人の資格となりますから、神戸大学経済経営研究所が理事となることは無理なのです。社団法人になりますと、これは人の集まりで構成しますから、益々もって機関加入という原則が崩れてしまうわけですね。だから法人格を持たねばならないというか、持つ社会的要請も段々出て来るとは思います、それと同時に現在の規定による協議会の機関加入という一つの原則が、どうかかわりあって行くかが問題となるでしょう。

原 そら、構わないんじゃないですかネエ。例えば、我々の大学にも財団がありますね。事務所は、神戸大学に置くが、ただ理事長や、理事が個人でないといかないだけのことで……。

前田 いま、理事機関として京都大学経済学部だとか、経済研究所として勤めているわけですね。一個人が理事じゃないわけですね。

原 それは確かにそうです。

杉本 公益法人の場合、学術公益法人だったら我々公務員が現職のまま理事になれるんですから、その点は心配ないと思うんですけどネ。ただ機関で財団法人加盟ってことが出来るかどうか……。

原 その代表者が理事になるとか……。やっぱり機関の名前では出来ませんでしょうネ。

前田 現在の会員機関数でもって、法人化を考える時期には、まだ到っていないかもしれませんが、協議会としては新しく会員をふやす方向を考えているのか、それともこの程度にしておくのか、将来の協議会の活動とあわせて考えた場合、どのように臨むべきでしょうか。

松田 二つ問題があると思うんですけど、一つはやはりビブリオグラフィが中心になるのかという事と、それから、今度始めた統計資料の総目録、あれは一種のユニオンカタログなんですネ。そのユニオンカタログの作成にまで踏切るのはということ、統計資料は、前田さんが発案なさったと思うんですけど、結局ユニオンカタログを作って、それをうまく利用して行こうと思います、どうしても会員機関はふえざるを得ないという形になると思うんですヨ。そうでなくて、インデックスを充実させようという形になって行きますと、それはどっかに一種のセンターみたいなものを作って、そこに専従の人を置いてというふうな形になってくると思うんですね。結局両方の仕事に手を付けてしまったわけですけども、今迄の経緯で相互

貸借という発想は消えてしまった。それが又どういう形で生きてくるのか、それと今度の統計資料総目録とどう結びついて行くのかという所の見極めが付いて来ると少し違って来るんじゃないかと……。まだ、統計資料だけですから、大体今加入してる機関でいけますが、そのうち川原さんなんか、経済学史学会で昔やった古典調査を引受けて、古典に関するユニオンカタログを作ろうなんて言い出すと、入ってもらわなきゃならない機関が、又ずっとふえて来ると思うんです。そこらの所を一つ一つよく検討しておかないと、直ぐ次の組織の方向付けに響いて来るんじゃないかと思うんです。

川原 出来る出来ないってことを別にしまして、やりたいこと一杯あるわけなんですネ。やりたいことを言う前に、当面第一に考えなきゃならない事が一つあると思うんです。それは、相当会員数がふえて大きくなって組織も一応新しい態勢に変わって、段々運営が軌道に乗りつつあるとは思いますが、ここでスタート時代の主導的なメンバーであった機関が今でも中心になるのはやむを得ないと思うんですが、実際の仕事もやはりそこに集中しがちなんですネ。それで、もっと新しく入って来た会員機関に仕事を分担してやっていただくように、折角入って来られたんですから、恐らくいろいろ抱負がとおりになるし、おやりになりたい気持を充分持っていられちゃうと思うんです。それを何とかして掘り起こして、それぞれのパートで出来ることをやっていただくという方法を、すすめていかなくちゃいけないと思うんです。それは別にコンピューターを使うとか、ビブリオ村が出来るか出来ないとかにかかわらないと思います。そういう意味で、私は難事業ですけど、今度の統計資料の総目録には期待を持っているんです。チェックリストにしても、一応新しくお入りになったばかりの機関も加った協議会の半数13位の機関が、分担してやるって事になってますし、……。で、そういう所で各機関が、体験を積み重ねて行くことによって、協議会に対する親近感もますます、それから協議会の中心になって、これから動いて行こうというような自覚と責任と言いますか、そういうものも段々できて来ると思うんです。ですから、季報の採録一つにしてもやたらに分散するといろんな点で問題が出て来ることもありますけれども、むしろそれを恐れないで積極的に仕事をする機関をふやして行くという方向に仕向けていっていただきたいと思うんです。その後いろんなビブリオ村のこととか、(笑) コンピューターを使ってユニオンカタログをいろんな主題で作りたいかという夢が実現する方向に向かって一歩一歩踏み出して行くんじゃないかというふうに思うんです。

司会 どうも有難うございました。誠に司会が拙くて、ご出席の皆さんから充分にお話を伺えませんでした、どうぞお許し下さい。最後に、杉本先生に締めくくっていただきたいと思います。

杉本 皆さんのご発言で充分言うべきことは言い尽されてますので……。特に最後に川原さんから締めくりにふさわしい発言がありましたので、何も申し上げることはありませんが、経済資料協議会は、今日成人式を迎えたわけですから、これからは一層社会的責任を自覚して立派な仕事をして行きたいと思います。その最初の仕事は統計資料総目録の編集になりますので、会員機関の皆さんには、どうか立派なものが出来ますように一層のご協力をお願いしたいと思います。又、今日はOBの方々が遠い所からお忙しい時間を削ってご出席下さり、有益なお話を聞かせ下さいまして、まことに有難うございました。どうぞ今後共変らぬご指導ご鞭撻をたまわりますようお願い申の上げます。どうも皆さん有難うございました。

編集後記

ここに、創立20周年記念号をお届けする。と言え大変格好がよいが、実は昨年の記念式典から丸1年を経て、やっと発刊の運びとなった次第である。気の抜けたビールを供するようなことで、この失礼を何卒お許しいただきたい。

研究論文および、レファレンス・ボックスの原稿は、昨年8～9月にいただき、上梓までに半年ほどの日時が経過したため、内容的にもずれが生じて執筆者には大変ご迷惑をかけたことをお詫びする。

創刊号からこの第5号まで引続き出版委員をしておられた、京大の小松氏が奈良県立短期大学へかわられて、出版委員をやめられたことを報告し、氏の今後のご健康とご活躍を希う次第である。

(越知)

経 済 資 料 研 究

No. 5

1972年6月15日印刷・発行

¥ 200 (〒 70)

編 集

経済資料協議会出版委員会

発 行

経 済 資 料 協 議 会
神戸市灘区六甲台町
神戸大学経済経営研究所内

印 刷

内 外 印 刷 株 式 会 社
京都市下京区西洞院七条南入ル

発売元

丸 善 株 式 会 社 書 籍 部
東京都中央区日本橋通 2-6-2